

【学生によるESD支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 第8回ユネスコ委員会 支援報告書

英語教育専修2回生 櫛 乃里花

1. 実施日 平成30年12月5日（水）
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 奥平茜、櫛乃里花（学部2回生）
奈良市富雄第三小中学校 教員、児童、複数名
4. 活動支援内容

平成30年12月5日、奈良市富雄第三小中学校にて第8回ユネスコ委員会が行われた。今回も国際交流班とビオトープ調査班とで分かれ活動を行った。国際交流班では、中学生は留学生へ贈るフォトブックを、小学生はクリスマスツリーの展示物をそれぞれ作成した。ビオトープ調査班では、ビオトープの観察と三学期の活動に向けての話し合いを行った。

今回の活動支援より、以下の2点について考えた。第1に長期的な視野を持つことの重要性について、第2に生徒・児童主体の活動の意義についてである。

第1の長期的な視野を持つことの重要性についてである。私が今回支援したビオトープ調査班の活動は非常に長期的視野を持った活動である。ビオトープに生態系をつくり、それを保護していく活動は決して短期間で達成されるものではない。現在のビオトープはまだ生態系が確立されておらず、少しの生き物と植物が生息しているのみである。しかし最初は固い砂地であったのが今では栄養を含んだやわらかい腐葉土へと変化しており、その変化だけでも大きな進歩で、長い時間がかかっているという。ビオトープ完成への道のりは長く、現在活動に参加している子どもたちのほとんどは完成した姿を見ないまま卒業してしまうであろう。しかしながら、ビオトープ調査をしたり今後について話し合ったりする子どもたちの姿は非常に楽しそうであった。目に見える成果にすぐには繋がらなくても、子どもたちはやりがいをもって取り組み、よりよいビオトープづくりのために小さな活動をコツコツと積み重ねていることがわかった。

第2の生徒・児童主体の活動の意義についてである。これはビオトープ調査班で三学期の活動について話し合っている様子を見て感じたことである。自分が小学生・中学生だった時を思い返すと、話し合いは先生の助言なしにはなかなか進まなかった。また、一人ひとりがしっかりと意見を持ち発表しあうことも難しかった。それに対し今回のビオトープ調査班の話し合いは、互いに発言を促し合うことで発言の機会が均等にあり、また自分の意見を持ち話し合いの場に出せる子どもたちが多かった。委員長・副委員長を中心に、子どもたちが主体となって話し合いを進めており、顧問の先生や環境カウンセラーの先生はあまり発言せず見守っているのみであった。このような話し合いができるのは、子どもたち一人ひとりがビオトープを運営する責任を自覚し、またよりよいビオトープの姿をイメージできているからだと考える。ESDによって育みたい視点の一つ「責任性」が、生徒・児童主体の活動によって育まれていると感じた。

今回の支援を通して学んだことは以上2点である。この活動の支援に行くのは初めてであったが、ESDに取り組む子どもたちの姿を間近で見ることができる貴重な機会であると感じた。



話し合う子どもたち